

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ラクダ遊牧民ソマリ族の生活

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00005871">http://hdl.handle.net/10502/00005871</a>

## ラクダ遊牧民ソマリ族の生活

池 谷 和 信

## 1. はじめに

ソマリ族は、「アフリカの角」と呼ばれる東アフリカのソマリア、ジブチ、エチオピア東部、ケニア北東部などの半乾燥地帯に住み、東クシ系のソマリ語を使用する。彼らはブッシュの中でラクダやウシを中心に飼養する遊牧生活を営むほかに、家畜や物資の運搬業や家畜商に従事する人も多い。

しかし近年、ソマリ族内の氏族間の闘争によってソマリア国内は無政府状態となり、外国からの援助物資が武装した追いはぎに奪われたり、約90万人近い難民がケニアやエチオピアなどの国外へ移住しているといわれる。このため、ナイロビやソマリアとの国境に近い町リボイなどでは難民の数が増加して、食糧や衛生上の問題が生じているのが現状である。

筆者は、ソマリ族の牧畜経済と国家とのかかわり合いを研究テーマにして適切な調査地を捜し求めたが、4か国にまたがるソマリの居住域での治安は良いわけではなく、長期の滞在をすることができなかった。そのため、悪い治安の一側面を示すと思われる彼らの略奪行動の把握を中心テーマにすることにした。

筆者は、ケニア共和国北東州ガリサ地区に調査地を設けて(図1)、1991年5月、10月、1992年1月、2月、3月と通算5回、のべ1か月にわたりソマリ族の氏族の一つであるアブダラー(Abdalla)のキャンプに住み込み、人と家畜との関係の観察と聞き取りに費やした。本稿では、乾燥地域に広くみられる旱魃によって、隣接する民族が認知しているテリトリーに家畜群を移動させるを得なくなったソマリが、どのような移動牧

畜を実施して隣接民族との間に闘争を起こしているのかを報告する。

## 2. 調査地の概観

ケニアの北東州は平坦地がつづき、高さ数mから2mの灌木に広く覆われている。州の西端を流れるタナ川沿いに限っては、幅4~5kmにわたって樹高10~15mの河辺林が発達しており、そこにはキリン、シマウマ、ダチョウ、グレノフ(シカ的一种)などの野生動物が生息している。キリンとラクダがアカシアの葉を食用にして共存する地域としては世界的にも珍しい。

毎年、同一地点での降雨がみられない点が、乾燥地域での降雨の特性として挙げられる。1983年から1987年まで、そして1991年のガリサタウンでの年降水量は、117mm, 618mm, 151mm, 227mm, 178mm, そして311.4mmと年変化が大きい。また各月別の降水量では、4月が最大で12月

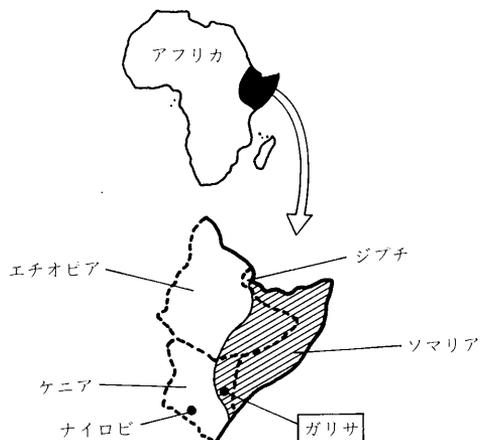


図1 ソマリ族の分布と調査地  
斜線はソマリの分布域を示す。

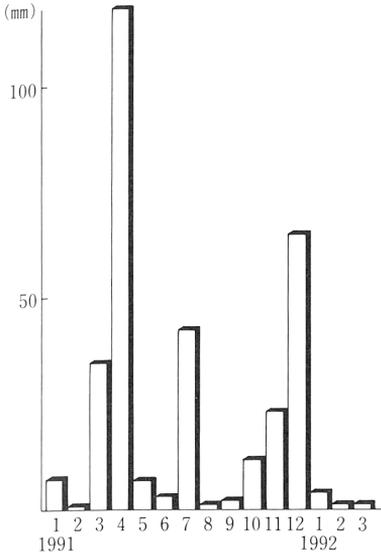


図2 ガリサにおける月別降水量  
(ケニア気象庁の観測データより)

が次につづき、1991年3月、7月も多い(図2)。

北東州の住民の大部分を占めるソマリは、1900年前後にメネリク二世によるエチオピア帝国の成立の際に、家畜を奪われたり戦争捕虜になったりして大きな打撃を受けたオガデン地域(エチオピア東部)から、ソマリア南部を通過してケニア北東部に移住してきた人々である。北東州内には、デゴディア、アウリハン、アブドゥワク、アブダラーなどの各々のソマリの氏族がおおよそ住み分けて分布し、宗教心の強いといわれるアシュラフが各氏族の中に点在する。

ソマリの分布は、北から南にかけてガレー族、ボラナ族、オルマ族などの同じクシ系のウシを中心に飼養する牧畜民との間に境界を形成している。そしてソマリが彼らのテリトリー内に移動して家畜を盗んだり、その後に居座ることが原因の一つとなって、民族間の闘争が生じているところがみられる。

北東州ガリサ地区の西側と海岸州タナリバー地区との境界を流れるタナ川沿いには(図3)、ガリサタウンやブラ村落の他には商品用のバナナを生産するバンツー系のポコモ族の農村を除いて定住集落は存在しなかった。1980年頃になるとケニア政府の定住化政策が浸透して、その一部は日本の天理教からの資金や人材の援助によって小学校や

クリニックが、10年前にコロコラ村とナニギ村、3年前にクムゼ村ののべ3村落に建設された。現在これらの村は、遊動生活をしてきたソマリの一部が道路の両側に家を建設した結果、集村の景観を呈するようになった。

1979年のセンサスによると、北東州ガリサ地区には12万8千人の人々が4万4千km<sup>2</sup>に生活しており、人口密度は3人を示す。その後1988年の人口総数は約22万人、人口密度5人となるなど、およそ10年の間に大幅に増加しているが、全就業者の81%が伝統的な遊動生活に従事する。

### 3. 移動牧畜の生活

ソマリの居住様式には二つの居住地があり、家族がいっしょに住みヤギ・ヒツジが管理される集落とラクダ放牧のためのキャンプという二分居住形態が指摘されてきた。しかし、家畜キャンプの中にウシキャンプも加える必要があり、ヤギ・ヒツジの混群やラクダ群がラクダキャンプと集落とに分散して置かれることもある。

1992年1月にすべての成員と家畜がかれ川の近くに集まった時のキャンプ構成物の配置を示す。ドーム型の5軒の家屋がタナ川沿いに自生するヤシの葉と草でおおわれている(写真1)。その他に木の柵でできたラクダ、ウシ、ヤギ・ヒツジの家畜囲いが一か所ずつみられる。ラクダの場合は、ラクダ囲いの中に子ラクダが入れられる一角があり、ヤギの場合は、所有別に二つに分けられた子ヤギの囲いは、ヤギ・ヒツジの混群の囲いと



写真1 遊牧ソマリの家屋

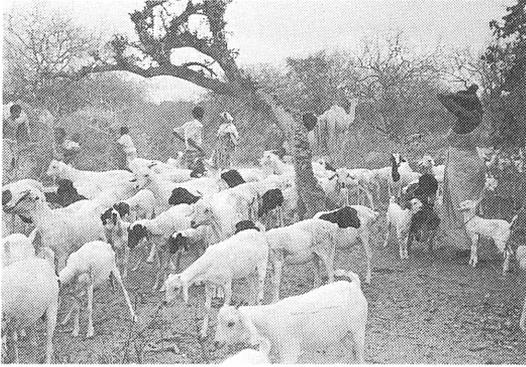


写真2 キャンプにおけるヤギ・ヒツジの混群

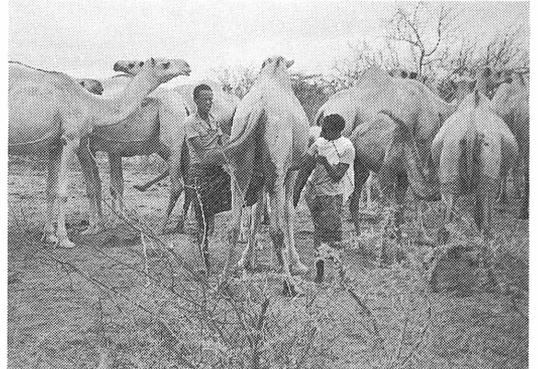


写真3 2人の男性によるラクダの搾乳

は別に設けられている(写真2)。

同じラクダでも泌乳ラクダ、種オスラクダ、仔ラクダは男性によって管理され、駄用ラクダは女性によって管理される。

駄用ラクダは、夜中じゅう両足をロープで木にしばりつけられていて、キャンプ内におかれるが、日中はキャンプの近くで牧夫の付添いなしに採食する。また、人工プールやタナ川などへの1~2日おきの水くみの際には、荷役に使われる。

ウシやヤギ・ヒツジは、一般的には午前7時より午後6時まで放牧される一方で、午前8時から午後9時まで8歳から16歳にかけての若者の男性によって、ラクダの日帰り放牧がおこなわれる。ラクダは高さ1 m以下から2 mまでの灌木の葉を採食するので、タナ川より6~7 km離れた灌木地帯が放牧地となっている。同じクシ系のレンディーレのラクダは、10~15日に1回の割合で給水されるといわれるが、ガリサのソマリは2日に1回の割合でラクダに給水がなされる。

放牧が終了すると、仔ラクダは親ラクダと引き離すためにラクダ囲いの一角に集められる。翌朝、6時から7時までの間に仔ラクダが1頭ずつ外へ出された後に、親ラクダの搾乳がなされる。2人の男性が同時に1個の容器を使って1頭のラクダから約500 mlのミルクをしぼり、11頭のラクダからのべ約6 lのミルクを集める(写真3)。

筆者が対象にした3世帯は、約10年前に建設された学校やクリニックのある定住集落の周辺部を短距離移動するキャンプA、ガリサタウンからブラ村落までの約80 kmの範囲の中で長距離移動をするキャンプB、そしてキャンプCとに分かれ

る(図3)。

移動ルートでは、キャンプの位置がタナ川より離れることは少なく、ガリサタウンに乳を供給する集乳圏内におさまっている。これは人工プール、タナ川の支流となるワジの川底を数mにわたって掘る井戸、タナ川の水などと各時期で異なる水源の場所と、ミルクの販売先となる村や町とキャンプとの距離に起因しているためと考えられる。

移動の際に、人間集団とラクダ、ウシ、ヤギ・ヒツジの三つの家畜キャンプとの組み合わせが分離したり集合している状況が常にみられる(写真4)。例えばキャンプCでは、図3中AからBへは数頭の泌乳ラクダと駄用ラクダ以外のラクダを移動させておいた後に、人々はラクダキャンプに合流する。その後、BからEまでは人と家畜が集合していたが、1992年1月にウシキャンプのみが別れる。そして同年2月にEからF<sub>1</sub>、EからF<sub>2</sub>へと一つのキャンプの成員を二つの集団に、家畜群をラクダキャンプとウシ、ヤギ・ヒツジキャンプに分離して移動する。さらに、同年3月F<sub>2</sub>においてウシキャンプ(G<sub>2</sub>)のみが分裂するが、次章で述べる略奪の被害を受けそこねてG<sub>1</sub>へひきかえす。またキャンプBでもタナ川沿いに南下した後に、例年に比べて降雨の少ない3月にタナ川を渡りオルマ側へ移動している。一方、キャンプAでは、販売用のミルクをとる泌乳ラクダをコロコラ村の近くの集落におく一方で、ラクダ群の放牧地となるブラ村落の近くにラクダ・ヤギキャンプをつくりオルマ側への移動はみられない。

### 4. ソマリとオルマ間の略奪

こうしたソマリ側のオルマ側への一方的な侵犯によってソマリとオルマ間の略奪が生じているため、すべての事件はオルマ側で発生している(図3, 写真5). 以下, 3つの事例を紹介していこう.

1992年3月23日午後6時半頃, ナニギ村の対岸にてオルマによって1人のソマリが銃で殺され, 300頭のウシが盗まれた. そのすぐ近くにウシキャンプをつくっていたキャンプ◎の男は危険なためにウシを連れてひき返す.

筆者は, この事件の直後に, タナ川を渡ってオルマ側のソマリ牧民の状況をかきまみる機会があった. 対岸のソマリの女性は, 毎日, タナ川を渡りガリサ地区のクムゼ村にミルクを販売に来ていたが, オルマ側を歩く時には, 必ず銃を肩にかついだソマリの男性が警備することになっている. また, 同一氏族内の親族関係のものが, 隣接してキャンプ地を設けている. ソマリのキャンプの全構成員が, オルマ側に居住しているものの, オルマの襲撃を恐れているのがうかがえる.

1992年3月13日, マサラニの対岸にて, オルマと放牧のためにオルマ側に侵入したソマリとの間に紛争が生じてたぐさんのオルマが殺され, 200頭のウシが盗まれた. この際に2人のソマリも死亡した.

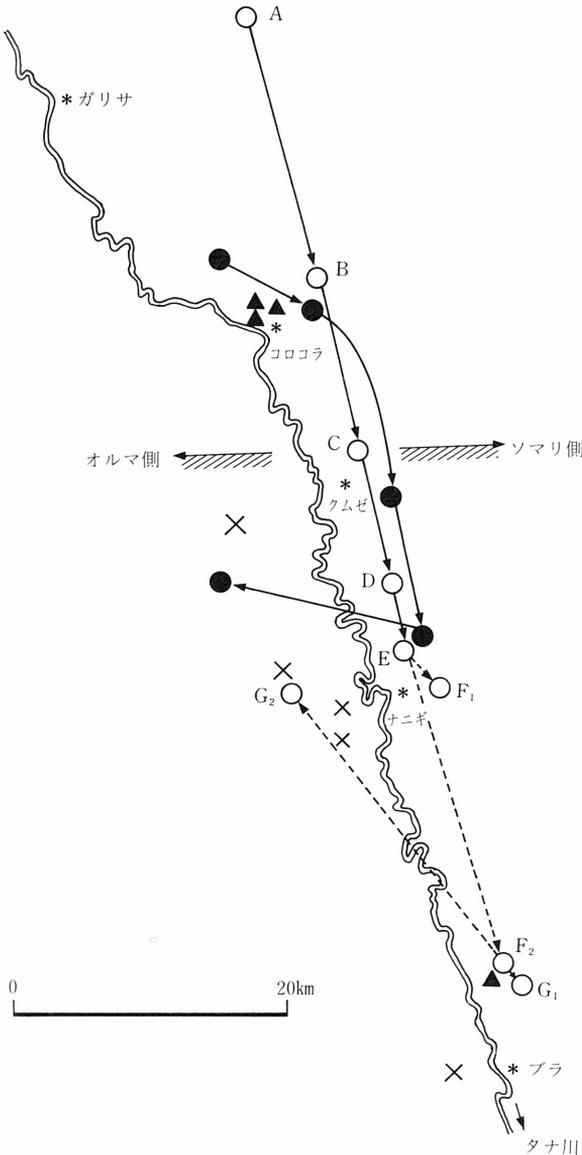


図3 遊牧ソマリの移動パターンと略奪の発生日点 (1991年5月~1992年3月)

- キャンプ◎
- キャンプⒷ
- ▲ キャンプⒶ
- \* 町や村落
- × 略奪事件の発生日点

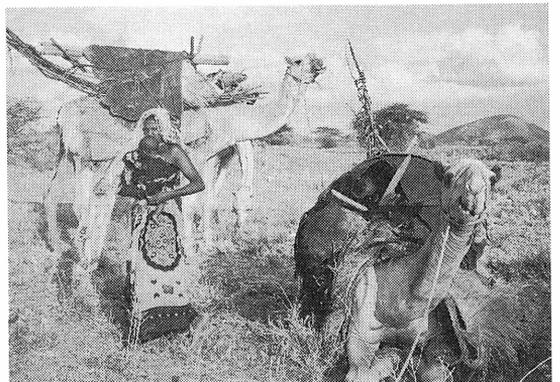


写真4 遊牧ソマリの居住地の移動

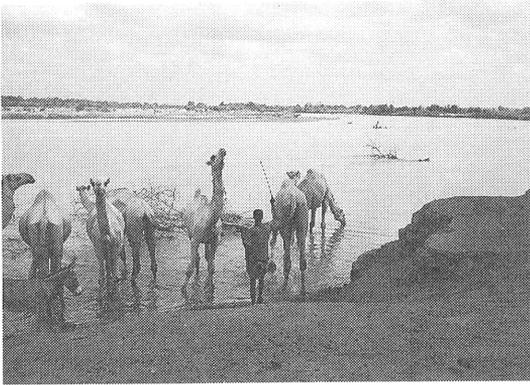


写真5 オルマ族とソマリ族の放牧地の境界となるタナ川

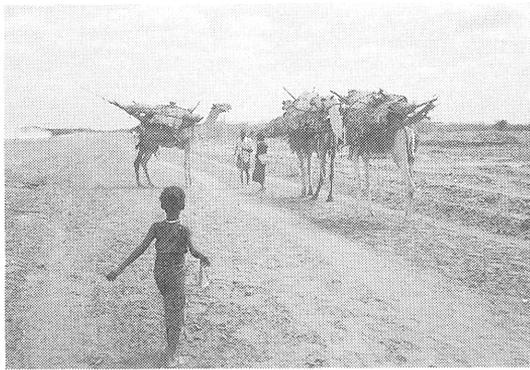


写真6 オルマ族との闘争によってソマリ側にもどるソマリ族

1992年3月中旬にも、ナニギ村の対岸にて150頭のソマリのウシがオルマによって盗まれた。しかしその後を追ってきたソマリが、オルマからウシを取り返した。

これら三つの事例が示すように、1992年3月には降雨が少なく、良質の放牧地を求めて多くのソマリがタナ川を越えてオルマ族のテリトリーへ侵入していった。その数は2月下旬には50世帯以上といわれる。その結果、両者の間で家畜の奪い合いや殺し合いが生じている。ソマリの中には元の場所へ引き返す場合（写真6）と銃を使って自らの家族を防衛してまでも、その場所にとどまる場合がみられた。なお、その前年の1991年6月、9月、1992年1月にも、両者の間での略奪がみられているが、その詳細は別稿で報告したい。

以上の事例からどのような世帯が略奪の被害にあっているのかをまとめてみよう。まず第1に、

集落はソマリ側に位置するが、ウシの採食地が不足するため牛群と牧夫から構成されるウシキャンプのみがオルマ側に移動する場合は指摘される。次に、当初はラクダ群と牧夫のみがオルマ側に移動していた後に、その他の家畜や構成員がそこで合流する場合がある。いずれにしても、ある範囲の親族関係が働いて、何世帯かがまとまって移動した直後に略奪の影響を受けている。

次にどのような要因が作用して略奪が生じているのかを考察してみよう。

ソマリが、タナ川を渡りオルマ側の放牧地へ行かざるを得ないのは、三つの理由によると考えられる。第1に、ソマリはラクダを中心に家畜とともに生きる人々である。ラクダの食料となる木の葉は降雨によってもたらされるといってよい。降雨がまったくないことは、ラクダの死亡につながり、彼らの生活の基盤が崩されることになる。略奪事件が生じている1991年6月、9月、1992年1月、3月は、例年に比べて降雨が少ないと彼らは述べており、降雨がないことが影響してソマリが放牧地を求めて隣接するオルマの放牧地に移している。第2に、ラクダの乳が商品となっているために、定住村の付近で常にラクダが飼養されているのである。キャンプやラクダ群がタナ川沿いから離れることができず、ガリサタウンの集乳圏内に集まっていることが過放牧の状況をうみだして、タナ川を渡って民族間の摩擦につながっていると考えられる。

第3にソマリの中には、ナイロビ市場に向けて搬出される家畜市で高価なウシの飼養を始めているものがある。このことは、ラクダ中心のソマリがウシを飼養するようになったことを示し、略奪の被害にあう要因となっている。つまりウシの餌となる草は、タナ川の左岸になるソマリ側には多くはなく、キャンプ◎の事例のように20頭のウシを放牧するために、乾季の終わりの3月にオルマ側の放牧地へ行かざるを得ないのである。

以上のことから、略奪は計画的に実施されたものもみられるが、ソマリのオルマ側への移動がきっかけとなって、両民族の出会いの機会が増えたことや放牧地をめぐる両者の競合が要因となって生じていることが多いと結論づけられる。

## 5. おわりに

現在、ソマリ社会は内戦と飢餓によって多くの人が死亡して、世界の注目する地域となっている。本稿の対象はケニア国内の遊牧ソマリの生活にあるが、同時に乾燥地域にラクダとともに生きるソマリの基本的な生き方をも示すことができたと考えられる。その中で中心的なトピックとして家畜を盗んだり、人を殺したりする彼らの文化としての略奪の現況とその要因を考察した。

その結果をふまえて、ソマリ社会における複雑な政治問題は、日本の新聞にもみかける国レベルの氏族間の内戦、ケニアの新聞でよく報道される地方レベルの武装した追いはぎの襲撃、そして本稿で紹介したローカルレベルでの民族間の略奪の三つの層からとらえることが重要であると指摘したい。そして現在のソマリア国内で問題化してい

るのは、主として町や村に定住するソマリが井戸の破壊や食糧不足などによって苦しんでいるのであって、遊牧ソマリの中にはケニア領への移動によって家畜とともに生きる生活を維持している人々がいることに注目したい。このことは、ソマリ社会の多様性をふまえて内戦や旱魃の影響を論じ、外部の諸変化にもろい定住生活の振興政策を再考する必要性を示していると思われる。

本報告の調査は、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターへの派遣の際に実施した。関係者の方々に心から御礼申し上げる次第である。

池谷 和信 (いけや・かずのぶ, 1958年生)  
北海道大学文学部 助手. 東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学. 学術修士. 研究課題: 生態人類学/人文地理学.

学振海外研究連絡センター派遣 (ナイロビ)  
派遣期間: 平成3年3月~平成4年4月

### 文部省科研費・重点領域シンポジウム 「情報伝達因子としての GTP 結合蛋白質」

日時: 平成5年1月25日(月) 13:35~17:35

場所: 東大山上会館大会議室(2階)

東京都文京区本郷7-3-1

プログラム:

▷血小板活性化因子とG蛋白質共役型受容体:

清水孝雄(東大)

▷G蛋白質によるCa<sup>2+</sup>チャネルの調節:

河西春郎(東大)

▷低分子量GTP結合蛋白質の活性制御機構と作用機構: 高井義美(神戸大)

▷低分子量G蛋白質rhoと細胞接着:

成宮周(京大)

▷特別講演

微小管結合性の新しい細胞骨格機能分子—物質輸送, 形態形成, 情報伝達に関連して:

広川信隆(東大)

主催: 重点領域研究「情報伝達因子としてのGTP結合蛋白質」総括班

参加費: 無料

照会先: 〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東大薬学部生理化学教室 (宇井理生)

電話 03-3812-2111(内線4750)

吉良龍夫, 宮脇昭, 岩槻邦男他編  
東南アジアの植物と農林業

定価3605円

●発行・日本学術振興会

宮山平八郎, 石塚喜明編著●文部省助成図書  
アジア・大洋州諸国における農学教育

定価16,789円

●発行・日本学術振興会